

序 損失と認知

この本では、臨床学の将来のモデルとなることを、精神分析に打ち勝つことを目指している新しい心理学のパラダイムの主張を検証する。パラダイムの変化とは？——それは認知行動主義によるものだ。その起源は？——アメリカ合衆国。一九六〇年代まで、行動主義的心理学はアメリカ合衆国では一定のステータスを享有していたが、ノーム・チョムスキーという言語学者の反対にあい、評判を落とした。言語能力は習得できるものでは決してない、それは生得的なものだと彼は主張した。チョムスキーは言語器官の研究に着手した。そしてそれはポスト・チョムスキー派のモデルに適う生得的な認識機械によって、行動主義とは異なり、当然完成するものと思われていた。この教義は三十年の時を経て、装いを新たにする。生物学や神経学の進歩によって、そして神経科学の名の下、さらに深まった混沌によって。

大学界限で広がる認知主義に関する新言語において、支配的なのは類義性である。ヴァレリーは「文明を招くのは、茫漠とした数多の見解である」といつたが、この見解の集積こそが、ラカン的な表現を使えば、誤解を生むに十分な類義性の発端である。茫漠とした数多の見解は、文明という共通の紐帯を招来するが、私達の間でありとあらゆる誤解が蔓延するのがおちである。正確さの要求に応えるべく科学が登場したのだが、この科学は言語を生み出すものの、それは社会的紐帯とは何の関係もないのである。

この新しい言語の本質は、類義性を最大限有していることである。それにより元チヨムスキー派、神経学者、生物学者、大学人が各々別々のことを語っているにもかかわらず、彼らの間で対話が、より正確にはあたかも共通の事柄を話題にしているかのような印象を与えることが、可能になった。この科学の名の下に交わされる対話は、無垢な社会的紐帯、見せかけだけの科学である。

認知主義者たちが生み出した新言語は、精神科医や心理学者たちの世代交代とともに、瞬く間に世に広まり認知された。大学の心理学における共通した理念（というよりむしろ願望であるが）は、心理学のテーマを学習システムに還元し、単純化することである。児童心理学を統一するというピアジェの計画は、論理や言語への準拠を放棄する代わりに、行動面での学習を強調することによって、当初の予想以上の成果を上げた。

後天的な経験が神経組織に記録されるという様態、つまり神経組織の可塑性は、学習モデルを一新した。認知行動主義の名の下に、人間の経験は新たに学習に還元、単純化されるにいたった。

それは行動観察のみならず、MRIによる脳画像、英語ではPETスキャンと呼ばれる磁気共鳴画像（ポジトロン断層法）によって記述される。これらの画像のおかげで、新たな心理学は神経科学のうちに位置づけられた、という主張である。

精神分析家の中にも、同様の方針を採用すべきであると主張する者が現れた。多様な認知モデルの中に、フロイト的無意識の過程が見いだされるだろう、というわけである。主観的な過程を、神経ネットワークの言語によって翻訳できる時代が到来した、と考える者までいる。これは認知主義の理論家だけではなく、神経科学こそがフロイトとラカンの発見を裏付けると考える、認知主義的精神分析の信奉者たちの謬見である。

ラカン派精神分析の立場から、本書はそうした主張を批判する——いわゆる神経ネットワーク言語による翻訳で、無意識は見失われる、と。精神分析の経験によって浮き彫りになる主体や、精神分析における対象もまた同様に見失われる。

無意識は学習とは無関係である。無意識はあらゆる学習を必要としない、もしくはその彼方にある。日中経験したり言われたり考えられたりしなかったことにこそ、夜見る夢の源泉はある。無意識は意識と異なり、学習から解放された思考の状態であり、その点が無意識を巡る議論を呼ぶ特殊性である。我々ラカン派は、学習（人々が学習に対して抱く、少しばかり洗練された概念など）の際（どうでもよい）による主体と、無意識の主体を根本的に区別する。無意識を、学習システムや学習の痕跡などに還元させてはならない。痕跡があるとすれば、それはトポロジ的な装置に関わ

るのであつて、大脳皮質という表面には書き込まれ得ない。文字というトポロジーのみが、説明を与えるのである。ラカンが用いるトポロジーは、向きづけ可能な曲面に書き込まれる痕跡システムという概念とは相いれない。シナプス結合を、携帯電話システム⁽²⁾のモデルに基づいて人工知能分野の用語で考えようと、将来我々の所在を完全に把握するであろうGPSシステム⁽³⁾を形成する人工衛星に関わる用語で考えようと、この際どうでもよい。いずれの見方も、無意識をあらゆる言語の多義性の堆積物ととらえる見方とは相いれない。

多義性とは、主体を経験の痕跡によつて推し量ることは不可能であることを示す、一つの言葉である。つまり主体は常に他の痕跡に誤つて接続されるのがおちなので、痕跡により主体を推量することは不可能なのである。

したがつて多義性により決定される主体は、学習と関わりを持たない。人は常に、原初的な痕跡に遡及することができないことに直面する。言い換えればチューケーに会おう。それは学習による痕跡ではなく、ラカンが言うように出会い損ねである。そして、出来事には常に多義性が関わる。

原初的な痕跡に遡及できないというだけでなく、学習という有限数からは多義性や言葉、言語といった無限の装置は生成しないのである。

神経科学が台頭する以前、ある一人のラカンの弟子が、無意識を学習システムに、なるほど性的ではあるが紛れもない学習システムに還元するモデルを提案しようとした。その人物の名は、セルジュ・ルクレールである。彼は、無意識は身体の性感帯に書き込まれる痕跡として理解できる、

と考えていた。各々の痕跡が結合することで、性的なそれらは言語と結びつくのだと。しかし彼は、以下のような問題に常に直面していた。言語システムが無限だとすると、有限な装置一式を備えたシステムから無限システムへの移行を可能にするシステムとはいかなるものであるのか？ 結局、ルクレールのモデルではうまくいかないのである。その理由は、例の二つのシステムを結合するためには、ラッセルの集合論のような主体の位置が要請されるが、そういう主体と学習によって生成する主体とは相いれないからである。ニューロンの可塑性の特性は、あり得るすべての痕跡を駆動させるどころか、経験をニューロンの痕跡に還元する目論見は、実現不可能であることを示している。

認知という観点や認知主義によって損なわれたもの、それはフロイトによって発見された無意識の新奇性である。分析主体〔ラカン派においては、クライアアントのことを分析主体と呼ぶ。精神分析〕の発話を急ぎ立てることにより、無意識は痕跡ではなくエクリチュールの中に、身体の外に見いだされる。それでも無意識は、留まり続ける享樂の経験により、生身の人間の身体に連接する。この本では三つの章にわたって、この点を論証する。

第一章では、ジョイスの作品に見るような無意識の位置を検証し、ジョイスの作品を言語モジュールというチョムスキーの概念に、ラカンがどのように関係づけたかを明らかにする。チョムスキーの認知主義と認知療法とは極めて異なり、お互い完全に無関係なプログラムが認知主義として一

括りにされてしまっているが、ラカンの省察はチョムスキーのプログラムと対話し、対峙している。各言語に、科学の出現を可能にした共通要素があると見なすことと、言語器官としての生成文法があると考えerことは、根本的に異なるものだ、とするラカンの省察こそが決定的である。ラカン派は、各言語間に共通要素があるとすれば、それは普遍文法ではなく、科学の成立を可能にするものである、と主張する。自然言語間で伝達されるもの、それは数字であり、数字こそが科学の出現を可能にした。

次いで論考は、主体を学習痕跡に還元することの不可能性に取り掛かる。神経科学と精神分析を連結すべく、ユニークな解を提唱したピエール・マジストレッティとフランソワ・アンセルメとの対話を特に取り上げる。二〇〇四年に出版された本の中で、彼らは心的痕跡というようなことを言っており、痕跡そのものよりむしろ可塑性を強調している。二人は、痕跡が記録される自動機械に還元される脳、という概念について議論を展開しているが、痕跡は大脳皮質だけでなく身体にも記録されると考えており、心身の相関関係について論じている。彼らは身体の状態と情動との間に固定した関係はない、と主張しているのである。我々としては、シナプスには記録更新の余地がある、そしてその意味において同じ大脳を二度と使うことはない、ということとは理解できる。しかしだからといって、主体としての登録を痕跡システムに還元することは、根本的に不可能であることに変わりはない。

第二章は第一章から派生したもう一つの不可能事、すなわち主観的な症状という独自性を、評価と称してチェック欄に押し込めることの不可能性に焦点をあてる。評価というイデオロギーに取り憑かれた仕組みは、すべてを画一化しようとする。あらゆる精神療法や治療技法は、一般評価プロトコルに従って、一種の共通コードに翻訳されかねない。

まずある論文が、フランス国立保健医学研究機構 (Insem) が二〇〇四年以降、精神療法を不適切な形式によって、つまりあらゆる精神療法実践を均質化することによって評価しようとした失敗を検証している。さらに二〇〇五年に行われた、専門家による「児童思春期における行動障害」に関する鑑定は、「問題行動ゼロへの反対」という嘆願書が提出される始末だった。こうした評価のための常軌を逸した仕掛けは、その厳密さが試される。問題は評価のための認知主義言語を介して、国家機関と公衆衛生官僚が連携している点にある。この新言語と評価のレトリックの結託が、今日の我々の状況と雰囲気を構成する酷たらしいからくりなのである。そして主体が住まう領域、つまり多義性を還元しようとする機構が作られ、その領域を言語能力や社会的能力、知識獲得能力、そして学習可能性の条件へと還元しようとする。

本書第三章には、様々な論文が収録されている。最初は、「大文字の他者の起源と心的外傷後の対象」というタイトルの論文で、動物種と人類の区別なく言語の起源の様態を探るという、ポスト・チョムスキー派の企てに対して書いたものである。ラカンに従う精神分析家は、レヴィニスト

ロース的な自然と文化の差異には同意しない。動物性―人間性の対比は、生物と語る存在の対比として、ラカンが刷新したからである。

二つ目の論文は、認知主義的精神分析の現状、精神分析的仮説を認知主義によって説明するといふ企てによって生じた奇怪な精神分析の現状を検証している。現在主流のアメリカ精神分析は、以前の自我心理学を認知主義言語に翻訳したものである。自我心理学的精神分析家たちは、記憶に関してはエリック・カンデルの生物学用語を用い、情動に関してはアントニオ・ダマジオの認知主義言語を用いる。この潮流は、精神分析が生き残るためには、科学的であるためには、認知主義的隠語を用いなければならないと主張する。こうして精神医学における政策が、心理学にも導入されたのである。実際彼らはすでに、精神科医との対話を維持するためには、DSM言語を用いるだけでは不十分で、症状よりむしろ障害に着目した分類を採用しなければならないと主張している。この主張は結局、精神分析の放棄に行き着くということをし、具体例を挙げて説明する。

そしてこの観点に、精神分析の言説の神髄を対置する。精神分析経験においては、現実界から主体は生起するのだが、その言説は精神分析に固有なこの現実界を位置づける。症状は、誤った認知として理解される「障害」という用語には翻訳不可能であることが、明らかにされる。症状ありきの主体という特異性の次元は、認知障害として理解される均質化カテゴリーに対立する。後者においては、幻覚という概念を知覚の誤りとして一般化するが、ラカンはそれは主体の真理であるということを示し反論した。認知言語の使用により、言語の乱用が、とりわけ類義語の愚かな乱用が起こ

った。脳科学は精神分析と同じことを言っているだとか、前者は後者を確証しているだとかを言わせるために脳科学を利用してはならない。むしろその二つを、科学的客観性と精神分析の対象性とは区別しなければならない。科学的客観性と精神分析の対象性とは相いれないのである。実際、ラカンによって「現存在」(Das Sein)として構築された例の対象、すなわち対象 a は、主体の存在に関わるものであるから、科学によっては証明されない。対象 a や症状に立脚して、主体が確信を伴って生成する様態に与える科学の影響について、問わなければならない。ラカン派精神分析実践の本分は、科学の言説によって製造された対象への順応についてではなく、精神分析における固有の、現実界という経験についての解釈を確立することなのである。